

2 長浜曳山祭<sup>まつり</sup>にみる歴史的風致

## ① はじめに

長浜曳山祭<sup>まつり</sup>は、長浜市の中心市街地の東部に鎮座する長濱八幡宮の祭礼として、例年4月13日から16日を中心に行われる。絢爛豪華な曳山の巡行と曳山の舞台で奉納される曳山狂言(子ども歌舞伎)、そして夕渡りや朝渡りなどの多彩な行事が繰り広げられる。

長濱八幡宮の祭礼の由来は、寛文6年(1666)の『江州湖東八幡宮勸請并ニ祭礼ノ由来』にみられる。元龜年間(1570~1573)の浅井長政との戦いに勝った織田信長から浅井氏の旧領を委ねられた羽柴(豊臣)秀吉が、琵琶湖岸の今浜に築城をしたときに始まると伝えられる。秀吉は、今浜を長浜と改め、小谷城下から寺院や商人らを移して城下町を形成した。兵火で焼かれた八幡宮は、社地を現在のところに与えられて復興し、秀吉は社領や祭田を寄進し、祭礼日も9月15日と定めた。このとき、秀吉は八幡太郎(源)義家の後三年の合戦の凱旋の様子をあらわした「太刀渡り」<sup>まちどしよりじゅうにんしゅう</sup>を町年寄十人衆(のち長刀組に移る。)に行わせた。これが長濱八幡宮の祭礼のはじまりで、そののち秀吉が待望の男子出生の祝いとして、長浜の町人に砂金を与え、町人たちはその金子をもとに曳山を造営し、秀吉が再興した八幡宮の祭礼に曳いたのが長浜曳山祭のはじまりといわれている。いずれにしても、秀吉が祭礼のはじまりに大きく関わり、長浜町人が現在に伝わる長浜曳山祭に発展させていったといえる。

この発展の要因には、長浜城の廃城後も、明治維新まで秀吉以来の長浜町屋敷年貢米三百石の免除地であったこと、長浜の町が湖上交通の拠点で、しかも、彦根藩領下において、湖北一円の年貢米等の物資集散地であったことなど、長浜の町が彦根城下とならぶ重要都市として保護されてきたことなどがあげられる。特に、江戸時代中期以降は、浜糸にくわえて浜縮緬<sup>はまぢりめん</sup>、浜蚊帳<sup>はまかや</sup>の生産が始まり、その生産・流通の町として栄えた。また、北国街道の宿場町、彦根三湊の一つとしての長浜湊の港町、湖北真宗の拠点長浜別院大通寺<sup>だいつうじ</sup>や長濱八幡宮の門前町など、多様な性格を併せ持つ52ヵ町、人口約4,800人の町として発展した。

なお、長浜曳山祭の祭礼日は、近世までは長濱八幡宮の秋季例祭が斎行される9月15日に行われていたが、明治以降は月遅れの10月15日となり、さらに第2次世界大戦後は、春季大祭が斎行される4月15日に行われるようになった。



【曳山祭版画(鳳凰山)(江戸時代末期)】長浜城歴史博物館蔵

② 建造物

1) 長濱八幡宮

長浜曳山祭の祭礼行事の多くは、長濱八幡宮を舞台として、あるいは発着点として行われる。

長濱八幡宮の創建は、元文3年(1738)の『長濱古記』にある「勝軍山新放生寺八幡宮の御事」によると、延久元年(1069)に源義家が後三条天皇に願って石清水八幡宮(京都府)より分霊を勧請したことにはじまる。旧長浜町のほぼ全域は、中世の石清水八幡宮神領(八幡荘)内に入り、長濱八幡宮はその荘園の鎮守社であったと考えられる。

戦国時代には兵火により衰微したが、羽柴(豊臣)秀吉が長浜城主のときに社地を現在地に移し、社殿の整備・復興が行われた。社殿は江戸時代中期に改築され、八幡宮は神仏習合して新放生寺と一体化し、境内の西側や南側には多くの社坊があったことが八幡宮絵図からもわかっている。当時の境内景観を示す文化11年(1814)の『近江名所図会』をみると、社殿、池、舎那院などの配置が、現在の八幡宮境内の構成に受け継がれていることがわかる。なお、現在の社殿は『近江坂田郡志』(1912)によると、明治18年(1885)に落雷により焼失したため、明治22年(1889)に再建されたものである。

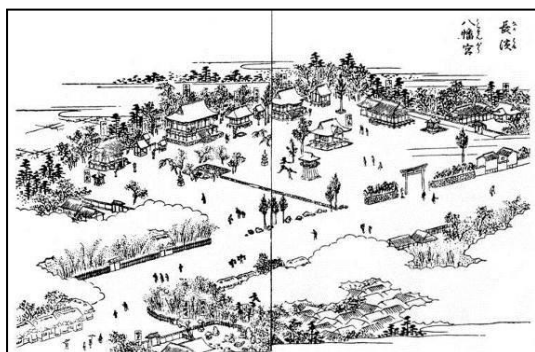
境内西隅の一の鳥居から入る石畳の参道は二の鳥居前で直角に折れて拝殿に向かっており、この参道や門前の通りは、長浜曳山祭の曳山巡行をはじめ、裸参り、夕渡り、朝渡り、太刀渡りなどの諸行事が行われる舞台空間となる。また、長浜曳山祭のほか、初詣、節分祭、萬灯祭などの行事のときは大勢の参拝客で賑わう。



長濱八幡宮



長濱八幡宮本殿・幣殿・拝殿  
明治22年(1889)建築(文書)



『近江名所図会』(文化11年)の長濱八幡宮絵図

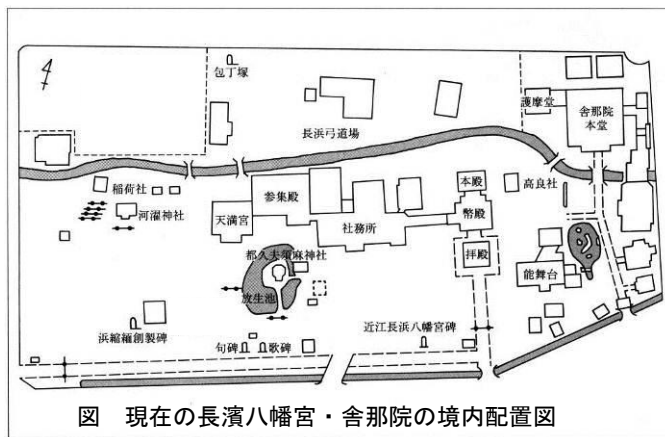


図 現在の長濱八幡宮・舎那院の境内配置図

2) 曳山蔵<sup>ひきやまぐら</sup>

曳山を出す町組織である「山組」は、江戸時代の長浜町・52ヵ町が基礎となり、これが13の山組に編成され、今日までほぼ継承されている。13の山組は、太刀渡りのみを行う長刀組と、曳山狂言を行う12の山組に分けられる。

それぞれの山組は、曳山を収納する山蔵<sup>やまぐら</sup>を保有している。各山蔵は、江戸時代からほぼその位置を変えておらず（一部は移転されたものあり）、概ねその山組の区域内にあるか近くに位置している。防火や湿度管理のために、それぞれ川岸や水路の近くに建てられているのが特徴である。『長浜曳山祭総合調査報告書』（1996）によると、山蔵の多くは文化・文政期に建てられ、山蔵外壁の下見板張や焼き杉板、扉銅板は比較的新しい時代に加えられたことが判明している。なお、13の山蔵全てが昭和60年（1985）3月29日、滋賀県指定有形文化財に指定されている。



1) 長刀山山蔵（小舟町組）  
文化文政以前建築（建築様式）



2) 月宮殿山蔵（田町組）  
文化13年（1816）建築（棟札）



3) 萬歳樓山蔵（瀬田町組）  
享和2年（1802）建築（亭の建築年代）



4) 猩々丸山蔵（舟町組）  
天保11年（1840）建築（扉吊元金具銘）



5) 春日山山蔵（本町組）  
天保12年（1841）建築（棟札）



6) 孔雀山山蔵（神戸町組）  
文化12年（1815）ごろ建築（亭の建築年代）

## 第2章 長浜市の維持向上すべき歴史的風致



7) 壽山山蔵 (大手町組)  
文化8年(1811)建築(扉吊元金具銘)



8) 高砂山山蔵 (宮町組)  
文化13年(1816)ごろ建築(亭の建築年代)



9) 常磐山山蔵 (呉服町組)  
嘉永3年(1845)建築(棟木墨書)



10) 諫鼓山山蔵 (御堂前組)  
寛政10年(1718)建築(山組文書)



11) 鳳凰山山蔵 (祝町組)  
文政12年(1829)ごろ建築(山組文書)



12) 青海山山蔵 (北町組)  
宝暦5年(1755)建築(曳山建造年)



13) 翁山山蔵 (伊部町組)  
文化文政前後建築(建築年代)

### 3) 祭りを支える町衆の町家

曳山の巡行する通りには、京町家の流れをくむ伝統的な建築様式の町家が多く残されている。これらの町家では、祭りを支える町衆が様々な商いを営み、生活していた。

#### 旧四居家住宅主屋（観光情報センター）

旧四居家住宅主屋は、間口5間半、奥行7間の平入平屋建ての比較的大きな町家である。外観は建ちが低く、卯建を高くあげた姿が印象的で、文化9年(1812)と明治5年(1872)に起きた2度の大火をまぬがれた長浜最古の町家遺構である。

『旧四居家住宅建築調査報告書』(2002)によると建築年代は、部材の古さや構造形式から18世紀初～前期と考えられ、間取は元治元年(1864)『南伊部町切絵図』のなかにも描かれている。当家は、伊部町組翁山の山組に属し、歴代四居治兵衛を襲名して油商を営んできた。平成12年(2000)に長浜市へ寄贈され、平成16年(2004)9月から「観光情報センター」として開館し、観光案内所及び展示スペース、古民家紹介スペースとして公開している。また、平成21年(2009)に主屋の復原工事を実施し、江戸期の様式に復原した。同主屋は、長浜における町家形式の原形であり、町家の発展過程の起点に位置する希少な町家であることから、令和元年(2019)12月5日、国の登録有形文化財(建造物)に登録されている。



旧四居家住宅主屋（観光情報センター）  
木造平屋建、鉄板葺  
江戸時代中期建築（調査報告書）

#### 安藤家住宅（北国街道安藤家）

安藤家住宅は、北国街道に面しており、安藤家文書によると明治38年(1905)から大正8年(1919)にかけて建てられた。店を通りに面して独立して建てた造りの表屋造りに虫籠窓、紅殻格子などが施されたしつらいは、長浜を代表する近代和風建築である。

安藤家は、秀吉が町衆のなかから長浜の自治を委ねた「十人衆」の一人であり、江戸期には十人衆のなかから選ばれる三年寄の一家として、長浜町の発展に力を尽くし、明治以降は、呉服問屋として事業を展開した。また、当家は北大路魯山人が手掛けた篆刻看板や離れの「小蘭亭」の天井画、篆刻の額、扉や襖、障子などがあり、「北国街道安藤家」として公開している。なお、当家は呉服町組常磐山の山組に属している。



安藤家住宅（北国街道安藤家）  
木造2階建、瓦葺  
明治38年(1905)建築（文書）

**黒壁ガラス館本館（旧第百三十銀行長浜支店）**

曳山の巡行路には、明治の近代建築物も所々に位置している。

大手門通りと北国街道が交差する札の辻には、旧第百三十銀行長浜支店、現在の「黒壁ガラス館本館」が建っている。この建物は、棟札から明治33年（1900）に建築されたことが明らかであり、土蔵造に建築当時に流行した洋風を取り入れた擬洋風建築である。壁を黒く塗り、軒下に腕木を入れて堅固な外観を示し、内部の天井や階段まわりの意匠は豪華で優れている。平成8年（1996）12月20日、国の登録有形文化財（建造物）に登録されている。ここは古くから最も人通りの多い辻であり、曳山の棧敷席の一つ「札の辻席」が設けられる。



黒壁ガラス館本館（旧第百三十銀行長浜支店）  
木造2階建、瓦葺  
明治33年（1900）建築（棟札）

**長浜旧開知学校**

旧長浜城下町の本町通り（現駅前通り）と北国街道の交差点には、県下初の滋賀県第一小学校として開設された「長浜旧開知学校」が位置する。棟札から明治7年（1874）に建てられたことが明らかな現在の建物は、八角形の檼をもつモダンな白い擬洋風の建物であり、かつては時を告げる大太鼓が備えられていた。外観は近年に改修されているものの、柱や梁などは建築当初のものが使用され、初期の学校建築の面影をとどめている。この建物は、平成12年（2000）10月18日、国の登録有形文化財（建造物）に登録されている。



長浜旧開知学校  
木造3階建、瓦葺、塔屋付  
明治7年（1874）建築（棟札）

③ 活動

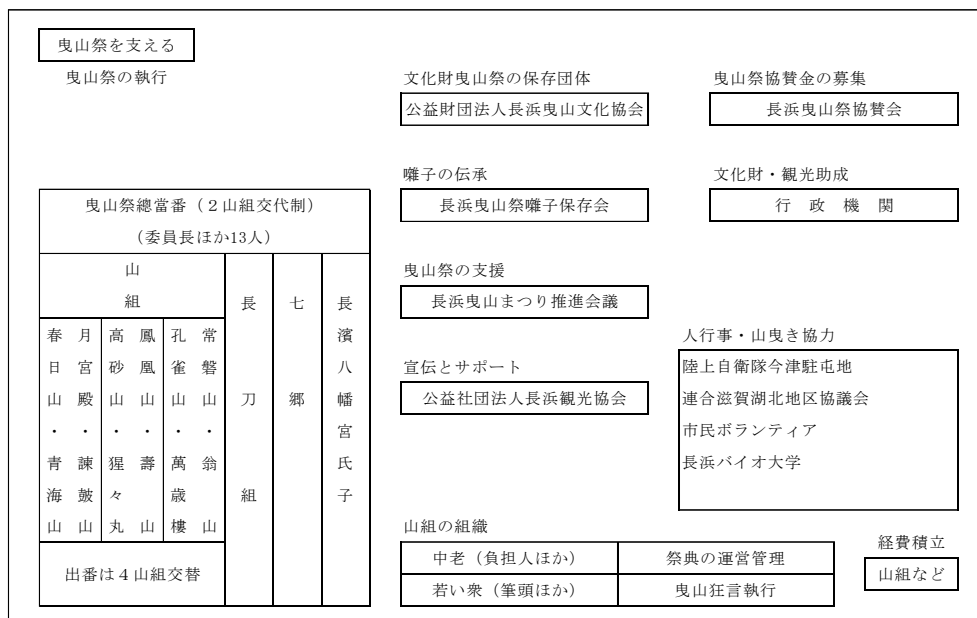
1) 長浜曳山祭を担う山組

曳山を出す町組織である「山組」は13の山組に編成されている。13の山組は、太刀渡りのみを行う長刀組と、曳山狂言（子ども歌舞伎）を行う12の山組に分けられる。

各山組は、おおむね45歳以下男性の「若い衆（山組によっては、若衆、若キ者、奇合という）」と、若い衆を終えた「中老」とで組織される。祭りの準備や運営、稽古や後継者育成には多くの人的、経済的負担がかかるが、これらを中心になって支える山組は、非常に強い人間関係で結びついている。

また、山組のほかに、七郷と呼ばれる組織がある。七郷は、長浜町の周辺の列見村、八幡中山村、八幡東村、三津屋村、南高田村、北高田村、宮村、瀬田村の8村の区域を指し、このうち南・北高田村は一つの郷として数えるため、七郷という。

長浜曳山祭を支える人々



それぞれの山組は、曳山を収納する山蔵を保有している。各山蔵は、山組の区域内にあるか近くに位置している。防火や湿度管理のために、それぞれ川岸や水路の近くに建てられているのが特徴である。なお、山蔵には曳山を飾る懸装品や曳山祭に使用する道具類も収納されており、曳山の飾りつけや山蔵の風通し、懸装品や法被などの虫干しは、山組の人々が集まり、共同で作業をしている。

長浜城の外堀でもあった米川の下流には、かつて長浜湊であった付近に、山組の一つ「船町組」の山蔵が位置している。湊町としての機能を持ったかつての長浜町は、古くから人や物資の行き来が盛んであり、この山蔵の脇には、文政の年号の入った常夜灯が建てられている。湖上交通の安全



【米川河口付近の常夜灯と狸丸山蔵】

を祈るこの常夜灯は、長浜湊を目指す舟の目印とされてきた。

このように、市街地の各所に分散して建てられている山蔵は、町並み景観の重要なアクセントになっている。

また、各山組では曳山狂言（子ども歌舞伎）やシャギリ（囃子）の稽古を行う稽古場を所有している。稽古場として用いられる建物は山組によってまちまちであり、町家と呼ばれる自治会館や山組関係者の個人宅（稽古宿）、あるいは山組内の寺院などが利用されている。

## 2) 長浜曳山祭の曳山

各山組は、それぞれ独自の構成と装飾を持つ曳山を保有する。長浜では、曳山（山車）のことを「やま」と呼ぶ。

長刀山を除く12基の曳山は、曳山狂言（子ども歌舞伎）を上演するための舞台や花道、楽屋、そしてシャギリを行う囃子方が乗り込む上部の亭を持つところに構造的な特徴がある。舞台の広さはおおよそ4畳半で、周りを高欄で囲み、正面に開口部が設けられている。舞台と後方の楽屋とは面幕と舞台障子で仕切られ、役者の出入りに用いられる。障子の後ろは太夫（浄瑠璃）と三味線を演じる三役台（三役とは振付、太夫、三味線をさす）、その後ろは楽屋襖をへだてて役者の控室となっており、周囲は幕で囲まれる。狂言執行時（子ども歌舞伎上演時）には、曳山の前面・両側面に花道（橋懸り）が引き出され、花道幕・胴幕も引き出される。亭は趣向を凝らした楼閣造りとなっている。

曳山本体の建造は18世紀後半から19世紀初頭で、上部の亭は後の19世紀前半ごろに付け加えられたものとみられる。各所には、木彫、鋳金具、障子絵、胴幕、見送り幕などの豪華な装飾が施され、工芸として優れた貴重なものが多い。各町では、曳山の新造や改造、あるいは見送り幕や鋳金具等の装飾品を充実させるため、競い合うように贅を尽くし、次第に今に伝わる絢爛豪華な曳山へと発展していった。

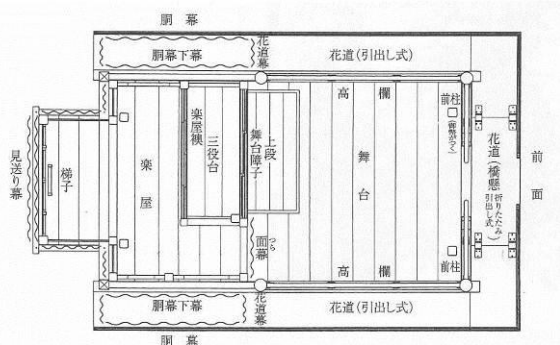


図 曳山平面図（壽山）

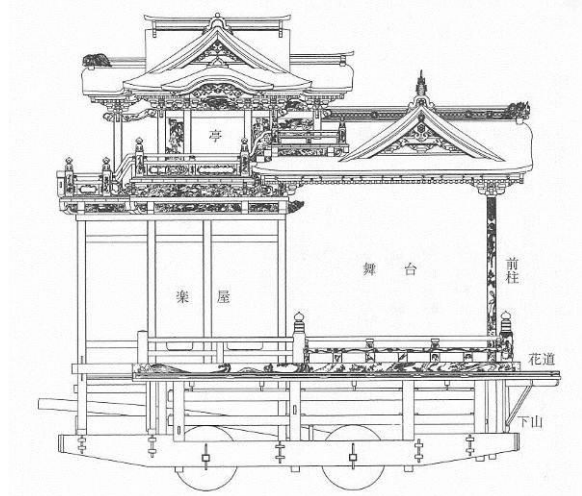


図 曳山側面図（壽山）

(a) 長刀山 (小舟町組)

別名を蓬莢山ともいう。曳山狂言 (子ども歌舞伎) を演じる 12 基とは異なった形式で、大きな 3 つの車輪が付いている。

上部には太刀渡りに用いる木太刀のぼりを飾り付ける。胴部の周囲には、6 頭の唐獅子彫刻がはめ込まれている。

この山車は、登り山では長濱八幡宮へは曳行されず、14 日に御旅所おんたびしよへ直接据え付けられる。15 日の戻り山では、「最初長刀組」として、先頭になって出発する。

安永 8 年 (1779) 藤岡甚兵衛の作



(b) 月宮殿 (田町組)

亭は重層で、上層は六角円堂、下層は方形となっている。亭上にはギヤマン製の宝玉を置き、下層両側面の引き戸には、ガラス絵がはめ込まれている。

舞台前柱「鯉の滝登り」の飴金具かざりの下絵は、狩野孝信の筆と伝わり、舞台正面の面幕は、中国明時代の刺繍ですぐれた作品である。幟は「朝鮮幟」と俗称されるもので、緋羅紗地に篆書で「天壤・無窮」をあらわす。

曳山本体は天明 5 年 (1785) 岡田惣左衛門重貞の作  
亭は嘉永 3 年 (1850) 藤岡重兵衛光隆の作

※ギヤマンとはガラスの古い呼称



(c) 萬歳樓 (瀬田町組)

亭は上 (前) 下 (後) 二段に分かれ、上亭の棟上に宝珠を置き、下亭屋根には宝剣をたてる。

舞台前柱の色絵象嵌造「高砂の尉と姥」の飴金具かざりは、彫金の諸技法を駆使し、写実的で豪華精巧な作品である。胴幕は「雅楽・楽器尽し図」の綴織つづれおりで、下絵は長浜出身の画家・沢宏靱さわこうじんの筆による。見送り幕は、飾毛綴かざりけつづれと中国製刻糸織とくいとおりの 2 枚がある。

曳山本体・亭ともに享和 2 年 (1802)

藤岡重兵衛安道・市松安則父子の作



(d) 猩々丸 (船町組)

山組の町名である船町組にちなんで御座船型の曳山で、猩々緋の帆をあげている。

他の曳山と違い、見送り幕にかえて見送り彫刻一對を飾る。彫物は中国三国時代の蜀の武将・関羽と張飛の木造彩色像である。また、背面には行列に用いる七ツ道具をたてている。なお、亭はなく、露台となり周囲に幕を張る。

曳山は安永3年(1774)藤岡和泉一富の作



(e) 春白山 (本町組)

亭は四柱造りで、むくり屋根となっている。

舞台前柱には「葡萄にリス」の写実的な飴金具を付け、舞台高欄の宝珠柱には、山号である春日山にちなんだ「紅葉に鹿」の飴金具があり、明治11年(1878)東京の一柳友寿の作という銘板を打つ。舞台障子「紅葉に鹿の図」は長浜市鳥羽上町の北村李軒の筆である。

曳山本体は平右衛門の作と伝わる

亭は後年の建造とみられるが、いずれも年代は不詳



(f) 孔雀山 (神戸町組)

亭は前部後部からなり、屋根は四柱造りを主体に千鳥破風などを付けた複雑な構造である。舞台屋根には、金銅製の尾羽を広げた「孔雀」を置く。

胴幕「虎の子渡し図」の刺繍の下絵は、森徹山の筆とも岸駒の筆ともいわれる。

見送り幕は、毛綴で草花に孔雀三羽を織りだす「萌春の図」は昭和3年(1928)山鹿清華の代表作である。

曳山本体は宝暦年間(1751~1764)の作という

亭は文化12年(1815)藤岡重兵衛安則の作



## 第2章 長浜市の維持向上すべき歴史的風致

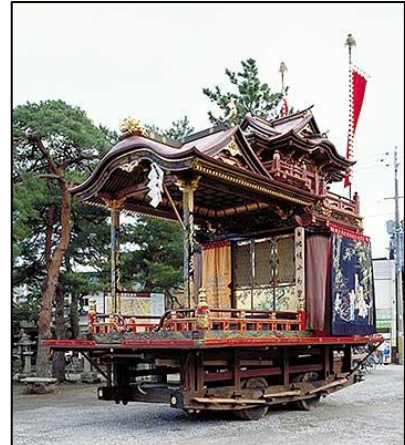
### (g) 壽山 (大手町組)

亭は八ツ棟造で、舞台屋根側面の千鳥破風の棟上に鯨しやらを置く。

舞台前柱「昇り竜・降り竜に雲と人物」の飭金具かざりは、長浜市国友町の藍水堂一徳の作である。

胴幕は、中国蘇州製の総刺繍「竹林七賢人の図」となっている。見送り幕は、中国明時代の綴織のものと毛綴織の2枚がある。

曳山本体は天明2年(1782)藤岡和泉利盈の作  
亭は後年の作だが、作者は不詳



### (h) 高砂山 (宮町組)

舞台屋根の正面妻を切妻とし、破風下端のみ唐破風をするのは、高砂山と青海山のみである。亭は八ツ棟造で、舞台の台輪には半肉彫鍍金の「兎が波上を走る」の飭金具を付け、舞台前柱「雲と垣根に瓢箪唐草」の透彫り飭金具が全体を覆っている。

見送り幕 全面刺繍「八仙人の図」と綴織「唐子遊戯の図」の2枚がある。

曳山本体は延享2年(1745)の修理記録があり、それ以前の建造とされる。

亭は文化13年(1816)、藤岡重兵衛安則の作



### (i) 常磐山 (呉服町組)

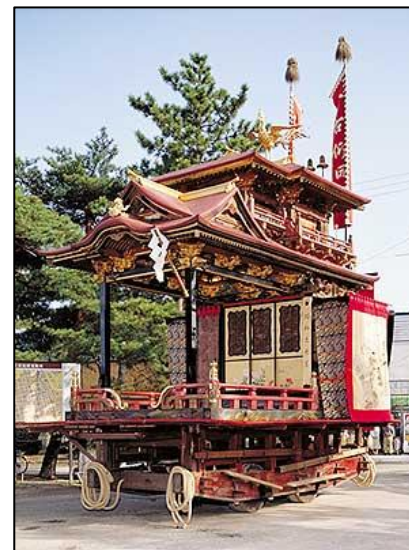
亭は四柱造りで、むくり屋根となっており、棟上には「鷓鴣」の木彫を置く。

舞台障子「花鳥図」は嘉永4年(1851)横山清暉の筆である。幟には「乾坤留一气」「古今仰同塵」の文字をあらわし、胴幕は、綴錦で「源義家勿来関を通る図」と「新羅三郎義光と豊原時秋との足柄山の別れの図」を織りだしている。

曳山本体の製作年代、作者は不詳

亭は文政元年(1818)の作だが、作者は不詳

※「鷓鴣」とは「鶉」の異名



(j) 諫鼓山 (御堂前組)

亭は重層で、宝形造の亭屋根の露盤上に中国の故事「諫鼓」にちなむ太鼓と鶏の木彫を置く。

舞台前柱には、天保14年(1843)目川(栗東)の奥村寿一が作成した色絵象嵌造「竹林七賢人」の飭金具を付ける。

幟は「朝鮮幟」と俗称されるもので、緋羅紗地に「昇り竜・降り竜」をあらわす。

曳山本体は安永3年(1774)藤岡和泉一富の作  
亭は文政元年(1818)田中加平治博君の作



(k) 鳳凰山 (祝町組)

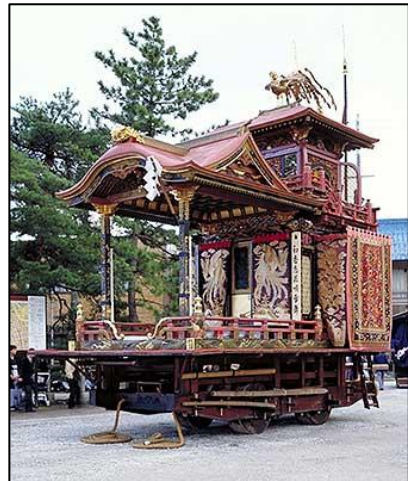
亭は四柱造りで、むくり屋根となっており、亭上には「鳳凰」の木彫を置く。

舞台前柱「松竹梅に琴棋書画」や舞台高欄宝珠柱「鶏」は、色絵象嵌造の飭金具で、奥村菅次の作と伝わる。

幟は「朝鮮幟」と俗称されるもので、緋羅紗地に「天覆」「地載」の文字をあらわし、賀茂胡保の筆である。

見送り幕は16世紀ベルギー製の飾毛綴で、重要文化財に指定されている。

曳山本体・亭ともに文政12年(1829)の作  
建造は藤岡和泉の作



(l) 青海山 (北町組)

舞台屋根の正面妻を切妻とし、破風下端のみ唐破風をするのは、高砂山と青海山のみである。亭は四柱造りで、棟上に「飛竜」の木彫を置く。

舞台前柱には「飛燕に雲と浪」の飭金具を付け、胴幕には紺羅紗地に波頭に乱舞する「飛燕」を糸糸や金糸であらわしている。

見送り幕は、中国明時代の官服を仕立てたもの、「飛燕に波図」のもの、「飛竜に青海波」のもの3枚がある。

曳山本体は宝暦5年(1755)藤岡和泉長好の作  
亭は文化2年(1805)藤岡重兵衛安道の作



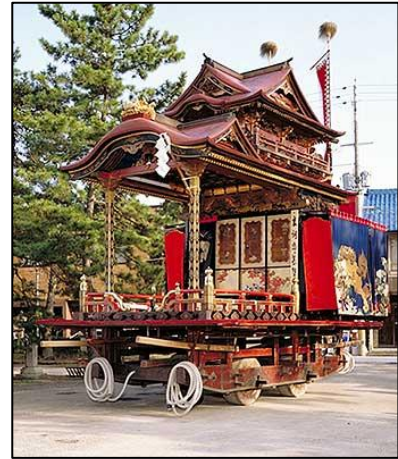
(m) 翁山 (伊部町組)

亭は八ツ棟造で、前後に唐破風をつける。舞台障子「花鳥図」は、長谷川玉峰の筆である。

面幕は、正面向かって左に「鯉の滝登り図」同じく右に「松樹上に猿の図」があり、猿の胴体には猿毛を植えてつけている。胴幕は、紺羅紗に「牡丹に唐獅子の図」を大きく刺繍している。

見送り幕は、16世紀ベルギー製の飾毛綴で、重要文化財のものと市指定文化財のものを所有している。

曳山本体は明和2年(1765)藤岡和泉一富の作  
亭の建造年・作者は不詳



(n) 重要文化財の見送り幕



翁山 見送り幕



鳳凰山 見送り幕

翁山と鳳凰山の2件の見送り幕は、重要文化財に指定されている。このうち、鳳凰山の見送り幕は、京都祇園祭の鶏鉾<sup>にわとりほこ</sup>の見送り幕、霰天神山<sup>あられ</sup>の前掛と共に本来は1枚のタペストリー(住居や神殿を美しく飾るための壁掛け)で、それが切断されて現在のような曳山や鉾の幕として用いられている。

また、鳳凰山の見送り幕は、16世紀後半にブリュッセルで職人ニケイズ・アエルツによってトロイア戦争を題材に製作された5枚連作のタペストリーのうちの1枚であることが判明している。山組には売買証文があり、この見送り幕は文化14年(1807)に200両で京都の商人から購入した記録が残る。

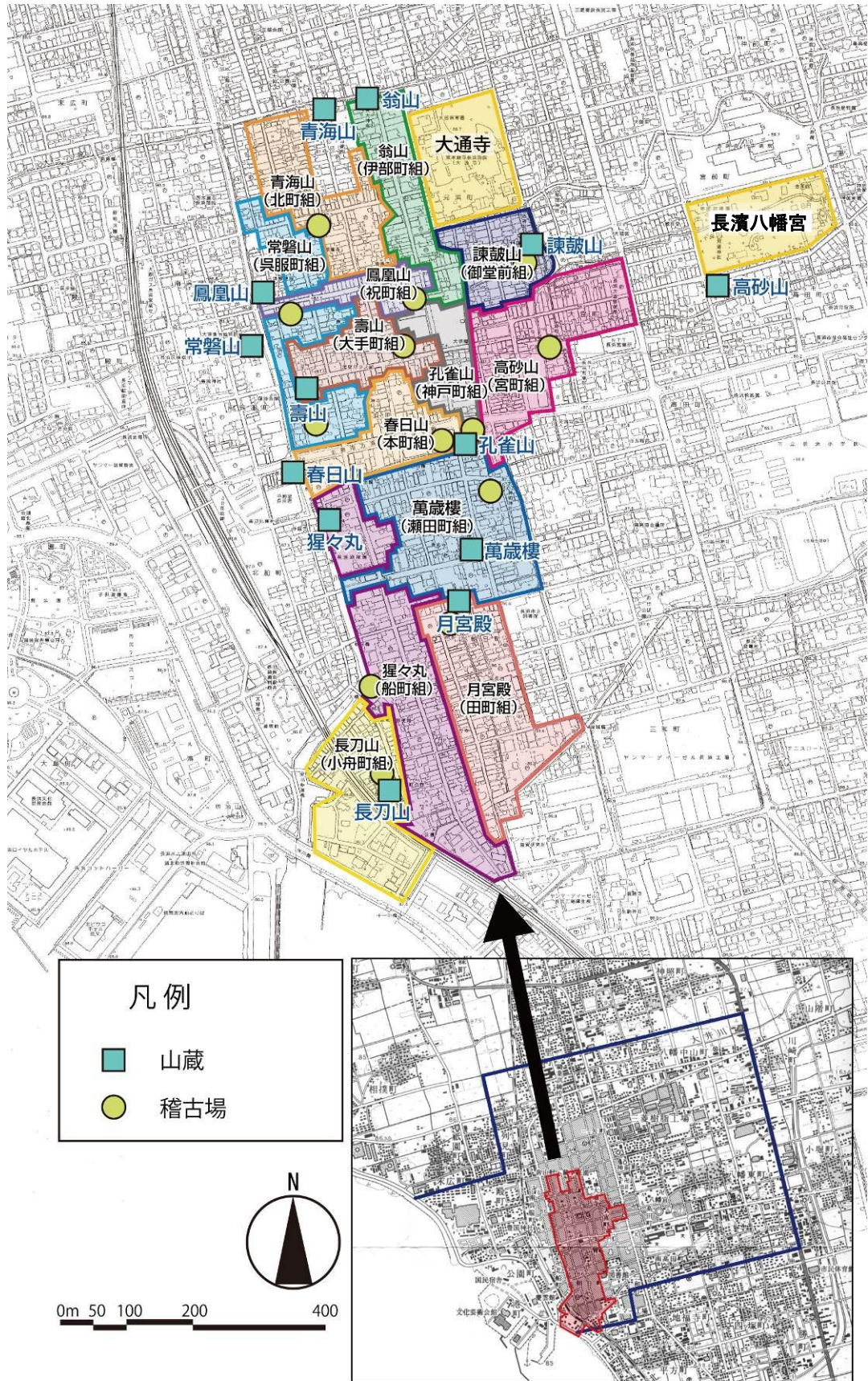
第2章 長浜市の維持向上すべき歴史的風致

表 各山組の曳山や山蔵など

山組名	曳山(山車)	山蔵	扇子	提灯	法被
ながなたやま 長刀山 こぶねまちぐみ (小舟町組)					
げつきうでん 月宮殿 たまちぐみ (田町組)					
ぼんざいろう 萬歳樓 せたまちぐみ (瀬田町組)					
しゅうしゅうまる 猩々丸 ひなまちぐみ (船町組)					
かすがざん 春日山 ほんまちぐみ (本町組)					
くじやくざん 孔雀山 こうどまちぐみ (神戸町組)					
ことぶきざん 壽山 おおてまちぐみ (大手町組)					
たかさこざん 高砂山 みやまちぐみ (宮町組)					
ときわざん 常磐山 こぶちようぐみ (呉服町組)					
かんこざん 諫鼓山 みどうまえぐみ (御堂前組)					
ほうおうざん 鳳凰山 いひんちようぐみ (祝町組)					
せいかいざん 青海山 きたまちぐみ (北町組)					
おきなざん 翁山 いべちようぐみ (伊部町組)					

## 第2章 長浜市の維持向上すべき歴史的風致

図 現在の13山組の区域と、各山蔵・稽古場の位置



太線の内側が「七郷 (長濱八幡宮の荘園であった八幡荘の区域)」の区域。

3) 長浜曳山祭の行事と準備

長浜曳山祭の年中行事

日 程	お も な 行 事
8月 末まで	次年度總當番委員人選、新旧總當番引継ぎ
8月 15日	長濱八幡宮萬灯祭囃子奉納（次年度出番山）
9月 1日	新總當番任期開始・次年度曳山祭運営はじまる
9月 末日	曳山博物館出展曳山山飾り（交代）
10月 中旬	秋の曳山巡行（曳山博物館展示曳山入れ替え） きもの大園遊会のための山飾り・展示・片付け（虫干し）
10月 13日 ～ 15日	長濱八幡宮秋季例祭神輿渡御・神輿還御（お迎え提灯・囃子）
10月 下旬	總當番出番山組集会（以後随時）
11月 1日	總當番山組集会（次年度出番山の確認）
12月 末日	曳山博物館出展曳山山飾り（交代）
1月 末まで	出番山三役・外（芸）題内定
1月	出番山若い衆初寄り・出番山子ども役者等依頼
1月 下旬	總當番出番山組集会、曳山祭協賛会総会・募金開始、三番叟公募開始
2月 1日	總當番山組集会（三役・外（芸）題決定・公表）
2月 中旬	出番山子ども役者顔合わせ・役決め
2月 下旬 ～ 3月上旬	出番山中老寄り・役割分担
3月 中旬	出番山若い衆総寄り・長刀組集会（役割分担）
3月 下旬	稽古場設営、役者稽古開始、若い衆稽古場詰め番はじまる
4月 1日	總當番総集会（日程・行事・進行の最終決定）
4月 中旬	出番山三役（振付・太夫・三味線）揃い、衣装・鬘合わせ 曳山山飾り、囃子保存会行事の日程決定
4月 9日 ～ 17日	曳山祭行事執行にともなう各行事、終了後山片付け
4月 ～ 5月	出番山中老後宴、役者後宴、若い衆後宴、出番山会計寄り 總當番出番山組集会、總當番山組集会（会計報告、反省会）
6月 末日	曳山博物館出展曳山山飾り（交代）
7月 ～ 8月	總當番事務処理・引継ぎ
年 間	囃子（しゃぎり）稽古

江戸時代より、長濱八幡宮の祭礼には、曳山狂言（子ども歌舞伎）を行う12基の曳山全てが出場していたが、明治19年（1886）から6基交代が基本となり、戦時期や戦後の混乱期は全基出場なしとなるなど幾多の変遷を経て、昭和29年（1954）から4基交代となり現在に至っている。

その年の出番に当たる山を出番山、非番の山を暇番山と呼ぶ。出番山は曳山狂言と曳山巡行を行うが、暇番山であっても、御幣迎えや御幣返しなどの祭礼行事は行い、本日には曳山を山蔵の前に曳き出して山飾りを行っている。

長浜曳山祭の準備が具体的に動き出すのは、總當番が決まり、各山組の責任者である負担人が總當番に報告され、初集会といわれる「總當番山組集会」が開かれる11月1日以降である。ここで出番山組の出場確認が正式に行われ、以後、出番山では芸題の内定、三役（振付、太夫、三味線）の内定、子ども役者の選定などの準備が進められる。狂言執行には、主役となる子ども役者（小学1年生から中学1年生くらいまでの男児）はもちろんのこと、台本をつくり演技を指導する「振付」、浄瑠璃を語る「太夫」、三味線をひく「三味線」の三役は欠くことができない。



【山組の稽古場（月宮殿）】

## 第2章 長浜市の維持向上すべき歴史的風致

2月1日の「總當番山組集会」で芸題と三役が正式に決まり、3月20日ごろから出番山組では稽古場が設営され、本格的な稽古に入る。台詞の読みならいから節まわし、立ち稽古と、1日数回の稽古が行われる。若い衆は交代で稽古場に詰め、子ども役者の世話としつけを行う。このころになると、毎夜、出番山の稽古場からは、まだまだつたない子ども役者の節まわしと三味線の音がまちなかに響いてくる。

4月1日には長濱八幡宮の参集殿で「總當番総集会」が開かれ、曳山祭の執行に関わる事項の最終決定を行い、いよいよ祭礼行事が始まろうとする。



【立ち稽古の様子】

### 4) 長浜曳山祭の祭礼行事

長浜曳山祭の祭礼行事は、桜の花が舞い散る4月9日から17日までの9日間にわたり、まち全体を舞台として繰り広げられる。

月日	行事	時間・場所	
4月9日	線香番	午後6時	出番山組稽古場
～12日	裸参り	毎日午後8時以降	出番山組町内から長濱八幡宮、豊国神社
12日	神輿渡御	午後6時30分	長濱八幡宮から御旅所へ
13日	起し太鼓	未明	全山組町内
	御幣迎え	午前7時	全山組町内から長濱八幡宮へ
	籤取り式	午後1時	長濱八幡宮
	十三日番	午後6時以降	出番山組町内
14日	狂言執行	午前中	出番山組町内
	登り山	午後	出番山組町内から長濱八幡宮へ
	役者夕渡り	午後7時	長濱八幡宮から一八屋辻へ
15日	起し太鼓	未明	出番山組町内
	春季例大祭	午前7時	長濱八幡宮
	役者朝渡り	午前8時30分まで	出番山組町内から長濱八幡宮へ
	長刀組太刀渡り	午前9時20分まで	町内から長濱八幡宮へ
	狂言執行	午前9時50分	長濱八幡宮。以後参道途中席と御旅所で
	神輿還御	狂言終了後	御旅所から長濱八幡宮へ
	戻り山	神輿還御終了後	御旅所から出番山組町内へ
16日	後宴狂言	終日	出番山組町内にて
17日	御幣返し	御幣返し	全山組町内から長濱八幡宮へ

4月9日 線香番

4月9日は、「線香番」が行われる。曳山狂言の上演が決められた時間内に収まっているかどうかを、總當番が各稽古場へ出向いて時間を計る行事である。時計のなかった江戸時代に、總當番から一定の長さの線香を配り、その燃え残りの線香を回収して、狂言時間の長短を計ったことに由来する。稽古場の前では、弓張提灯を手にした若い衆らが、總當番らの訪問を厳粛な面持ちで待ち受ける。なお、この日から稽古が一般公開され、4月12日までのあいだ、稽古場の前には多くの人が訪れ、子ども役者の稽古を見ている姿が見受けられるようになる。



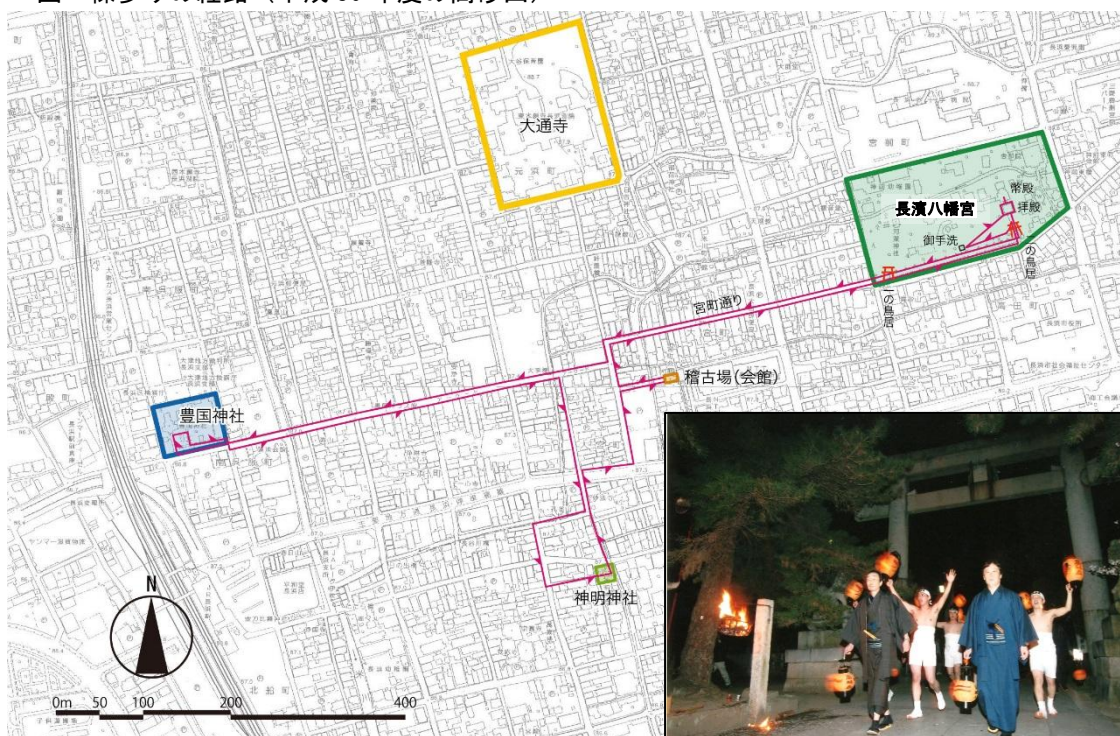
【線香番】

4月9日～12日 裸参り

9日から12日の夜にかけて、出番山組の若い衆によって「裸参り」が行われる。裸参りは、曳山狂言奉納・曳山巡行の順番と子ども役者の健康、そして祭りの無事を祈願するために行われる。

出番山では、稽古が終わり役者を家に帰すと、稽古場や町家に若い衆が集まる。そこで裸参りの装束に着替え、若い衆から選ばれた籤取人（独身男性）を中心にして出発前の酒盛りが始まり、午後8時ごろになると、中老からの出発の促しがあり、順次各人の弓張提灯に火が入る。こうして、若い衆筆頭の先導のもと、赤鉢巻きをした籤取人を真ん中にして3人で肩を組み、その後に二列縦隊の若い衆が続く。白サラシにキマタ、足もとは地下足袋という装いで、手に手に山組の弓張提灯をかかげて肩を組み、「ヨイサ、ヨイサ」のかけ声も勇ましく町内を出発する。

図 裸参りの経路（平成30年度の高砂山）



【裸参り】

## 第2章 長浜市の維持向上すべき歴史的風致

裸参りの隊列は、自町を出発すると、祭り本日の曳山巡行路となる大手門通りから宮町通りに出て、長濱八幡宮へ向かう。長濱八幡宮での参拝順序は山組によって様々である。高砂山（宮町組）の例では、一の鳥居から二の鳥居をくぐり、御手洗での水垢離のあと拝殿をまわり、本殿に参拝する。花冷えするような寒さのなかで身を清める若い衆からは、長浜曳山祭にかける熱気がほとぼしっている。

その後、長濱八幡宮から豊国神社へ向かう途中、12日夜に限り、大手門通りで長浜曳山祭囃子保存会による賑やかな迎えシャギリのなかを通り過ぎる。裸参りの途中で、ほかの山組と出会ったときはお互いの氣勢が上がり、緊迫した雰囲気が漂う。豊国神社の参拝、神明神社の参拝を済ませ、自町へ戻ってからは、三役（振付、太夫、三味線）の宿舎や各子ども役者の自宅、若い衆筆頭宅へ激励に回り、裸参りは終わる。

このとき参拝する豊国神社は、羽柴（豊臣）秀吉の三回忌にあたる慶長5年（1600）に、秀吉の恩徳を慕った長浜町人が「豊国大明神」を祀ったのがはじまりである。しかし、江戸時代に幕府は秀吉を神格化することを禁じたため、社殿は取り壊され、以後は秀吉の御神像は町年寄の邸内で密かに守り継がれた。寛政5年（1793）蛭子社として復興し、社内に御神像を密かに祀り続けた。明治維新後に晴れて「豊神社」と改められて社殿も建立され、大正9年（1920）に「豊国神社」となった。



【豊国神社】

裸参りの際に豊国神社に祈願するのは、長浜曳山祭のはじまりに大きく関わり、長浜の発展の礎を築いた秀吉への感謝報恩に由来するものである。

### 4月12日 神輿渡御

12日の午後6時30分、長濱八幡宮からその西方約800mにある御旅所へ神輿が向かう「神輿渡御」が行われる。

この御旅所は、かつて長浜城内であった場所に位置しており、現在地の東を流れる水路は、かつての長浜城の外堀にあたる。長濱八幡宮の管理地として、江戸時代初期に神輿堂が建てられたのがその始まりである。



【御旅所】

神輿は延宝4年（1676）に八幡宮氏子から寄進されたもので、長濱八幡宮から宮町通りを経て大手門通りに入り、大手橋の東手前で片町通りを南へ向かい、妙法寺門前で西へ曲がり、八幡町通りを南に行き、次の角を西へ向かい、瀬田町通りから北国街道に出て北へ向かい、札の辻で再び大手門通りへ出て西へ曲がり、御旅所についた神輿は15日の夜まで神輿堂に安置される。

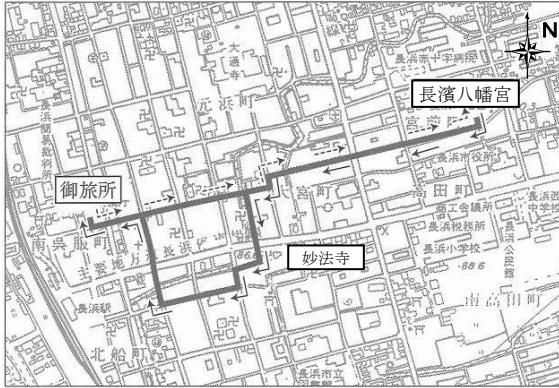


図 神輿巡行経路 実線矢印：渡御（12日） 波線矢印：還御（15日）



【神輿渡御】

#### 4月13日 起し太鼓

13日の「起し太鼓」は、その日行われる長濱八幡宮の御幣迎えにそなえ、午前0～2時から夜明けにかけて、祭礼関係者の戸を叩き、祭礼の始まりを知らせる行事である。山組ごとに行われ、若い衆がシャギリの屋台を曳きながら、笛、太鼓、締太鼓、摺鉦による「起し太鼓」の囃子に、時には三味線も加わって、真夜中の市街地に賑やかな音色が響き渡る。

#### 4月13日 御幣迎え

「御幣迎え」は、曳山に飾る御幣を長濱八幡宮へ迎えに行く行事である。御幣迎えは、出番・暇番にかかわらず、12山組と長刀山も参加する。狩衣に烏帽子姿の男の子が御幣持ちとなり、警固の金棒引きを先頭に、朝風呂に入って身を清めた負担人や若い衆・中老らが列をなして御幣を迎えに行く。御幣を拝受した各山組は、一の鳥居前に整列した八幡宮宮司や總當番委員長らに見送られて自町に帰り、これによって本格的な祭礼がはじまる。



【御幣迎え】

#### 4月13日 籤取り式

13日の午後1時には、出番山の若い衆から選ばれた籤取り人が長濱八幡宮に参会し、籤を引いて曳山狂言の順番を決める「籤取り式」が行われる。町内と八幡宮の行き来は、金棒引きを先頭に、負担人が籤取り人を従え、各山組特有の意匠を凝らした扇子「招き扇」を頭上に振りながら掛け声をかける若い衆がこれに続く。八幡宮では、一番山を引き当てるため、籤取り人を景気づける若い衆の「ヨイサ、ヨイサ」の掛け声で、神前はしばし騒然とした空気に包まれる。



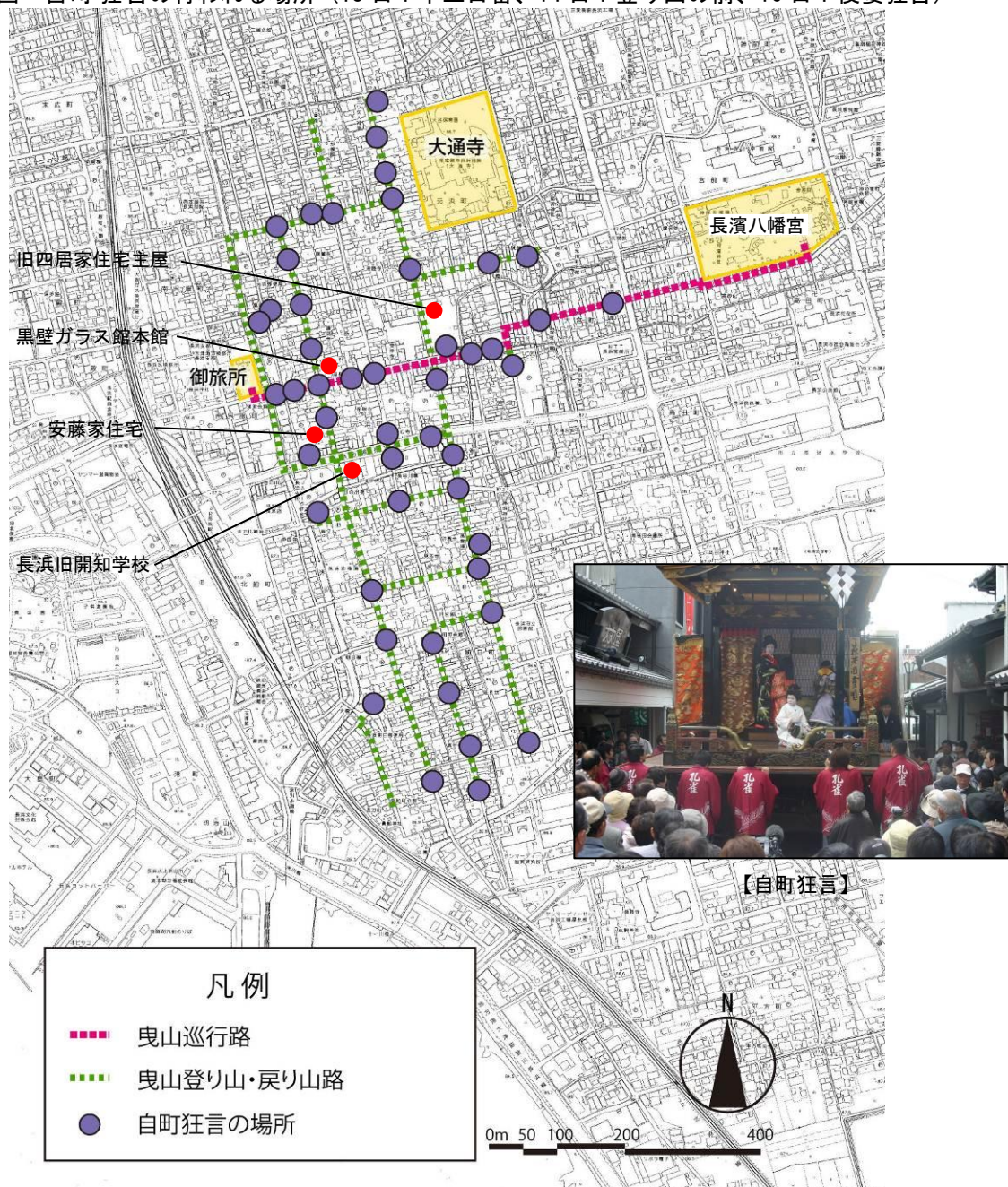
【籤取り式】

4月13日 十三日番 <sup>じゅうさんにちばん</sup>

13日夕刻からは、曳山の舞台上で初めて狂言を行う「十三日番」が出番山の町内で行われる。役者の化粧や本衣装が整い、曳山の舞台も整えられると、若い衆や中老、役者親や家族、親類らに見守られながら、緊張した面持ちの子ども役者が堂々と見得を切り、大きな拍手喝采を浴びる。

なお、自町内で行う狂言を「自町狂言」という。自町狂言は、13日の「十三日番」、14日の「登り山」の前、16日の「後宴狂言」で行われ、下記の図に示すとおり、町内の各所で行われる。

図 自町狂言の行われる場所（13日：十三日番、14日：登り山の前、16日：後宴狂言）



4月14日 <sup>のぼ</sup> <sup>やま</sup> 登り山

14日の午前中は、出番山の町内で自町狂言が行われたあと、午後から長濱八幡宮へ曳山を曳く「登り山」が始まる。役者たちを舞台にのせた曳山は、シャギリの音色と若い衆らの力強い「ヨイサ」の掛け声が響くなか、高く振りかざされた招き扇に導かれ、四番山から一番山の順に自町を出発し、安藤家住宅や旧四居家住宅主屋、黒壁ガラス館本館、長浜旧開知学校の前などを通り、八幡宮へと曳かれていく。

曳山は参道となっている宮町通りを東へ向かい、八幡宮の「一の鳥居」の前で南側の道を通り、境内曳き入れの入口「筋交い橋」のところで一旦止め置き、神前入り（境内入り）にそなえる。ここで、「正装」という曳山の最終の飾り付けを済ませたあと、筋交い橋から神前入りし、所定の位置に据え付けられる。夕方には全ての曳山が境内に並び、提灯や燭台には灯りが入れられる。

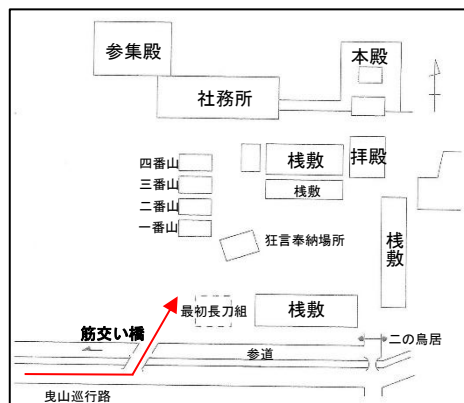


図 長濱八幡宮の境内



【登り山】



【長濱八幡宮に据え付けられた曳山】

4月14日 <sup>ゆうわた</sup> 夕渡り

14日の午後7時から行われる「夕渡り」は、子ども役者らが長濱八幡宮から町内へ帰る行事である。八幡宮の境内を筋交い橋から出て、宮町通り、大手門通りと西へ進み、神戸町の一八屋席で渡り終わる。

夕渡りの行列は、金棒引きを先頭に、陣提灯1対、榊持、御幣持、面箱持、舞台方、役者と続き、最後に中老、見送り箱と幟がつく。役者はその役にあった足取りで、狂言（子ども歌舞伎）終了時の姿で渡る。その両側には警固の若い衆がつき、手に馬上提灯を掲げ、役者の顔や足もとを明るく照らしている。行列の途中では、子ども役者が見得を切り、行列を見に来た人々から掛け声や拍手を浴びている。



【夕渡りで見得を切る子ども役者】

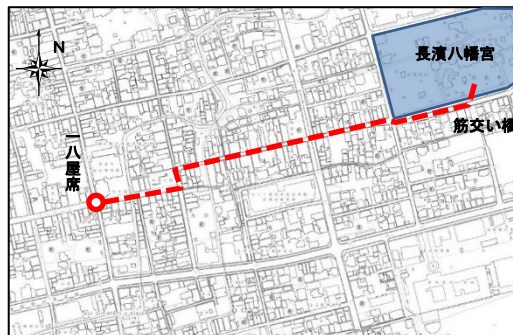


図 夕渡りの巡行路（4月14日）

4月15日 本日

15日の本日は、未明の起し太鼓で始まる。役者の化粧や衣装が整えられると、午前8時前から「朝渡り」が行われる。各山組の若い衆や役者らは、夕渡りと同じ行列を組んで、各町内から長濱八幡宮へと向かう。

午前9時10分になると、長刀組による「太刀渡り」が長濱八幡宮の一の鳥居前に到着する。源義家の八幡宮社参の姿を模したものといわれ、秀吉が長濱八幡宮の復興に際して始めさせたと伝えられる。渡りは、大きな金の御幣を先頭に、武者を案内する力士、次に2m余りもある木製の太刀を帯びた子どもの鎧武者が従者を連れて続く。長刀組の若い衆が務める力士は、紋付の着物をつけて角帯をしめ、裾からげをして臀部を見せ、前には化粧まわしをして「尻まくり」で渡る。



【太刀渡り】

長刀組の「太刀渡り」が済むと「翁招き」が行われ、これを合図に一番山はシャギリを囃しはじめる。そして、八幡宮の拝殿を正面とする奉納場所へ曳山を曳き出し、いよいよ曳山狂言（子ども歌舞伎）が奉納される。

一番山では狂言の前に三番叟が演じられる。三番叟の演者は、4月13日の籤取り式のあと、一番山が決まると、一番山の山組で演者を選び、数時間の練習で演じていたが、昭和63年（1988）からは、2月に市内で公募し、「矢籤神事」で選び、總當番が3月末から稽古をはじめている。



【一番山で演じられる三番叟】

三番叟が終わると高らかな出笛が吹かれ、ついで三味線、浄瑠璃がはじまる。こうして狂言（子ども歌舞伎）が始まり、子ども役者が可憐で優雅に見得を切ると、境内からは大向こうの掛声が飛ぶ。

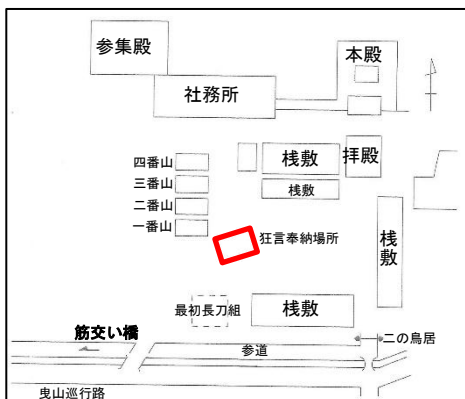


図 長濱八幡宮の境内



【長濱八幡宮での狂言奉納】

## 第2章 長浜市の維持向上すべき歴史的風致

長濱八幡宮での約40分の狂言奉納が終わると、切り笛が吹かれシャギリが囃されるなか、一番山は後退し、八幡宮の境内から退出する。筋交い橋を通過すると正装を解き、宮町通りから大手門通りを巡行して御旅所へ向かう。

このシャギリは御幣迎えや朝渡り、曳山の巡行、曳山狂言の際に囃される。郷土色豊かなシャギリは、太鼓・締太鼓1人、摺鉦1人、篠笛3~4人の合計6~7人で構成され、その場面ごとに、御遣り、神楽、奉演間、出笛、戻り山、起し太鼓などの曲目が演奏される。このほか一部の山組では、その山組にのみ伝わる独自の曲目もある。曳山の巡行、曳山狂言の際にはシャギリは曳山の2階部分にあたる亭で演奏される。

大手門通りは、かつての長浜城の大手筋にあたる通りである。ほかの通りよりも道幅が広くされ、最も人通りが多く、今も多くの商店が軒を連ねている。天候に左右されることなく長浜曳山祭を執行したいという地元の願いから、通りには太陽光発電の明るいアーケードが設けられ、その柱は旧長浜城天守の柱に見立てられている。

長濱八幡宮から御旅所へ向かう曳山は、宮町通りと大手門通りの各所に設けられた棧敷席で狂言を行いながら巡行する。この道中には、鮎熊席、金屋席、一八屋席、米嘉席、札の辻席という5つの狂言席があり、各曳山はこのうち2つの席で狂言を執行する。二番山以降も、三番叟はないが、同様の方式で順次狂言を行う。



【大手門通り】

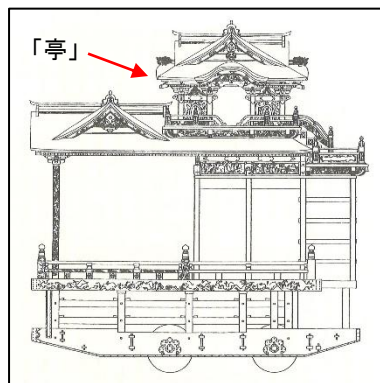


【かつての棧敷席】

「長浜市史第6巻 祭りと行事」より転載



【平成12年に復活した棧敷席】



高砂山 側面図

図 曳山の巡行路と狂言席 (4月15日)



## 第2章 長浜市の維持向上すべき歴史的風致

御旅所へ巡行する曳山は、大手門通りを西へ進み、長浜城の旧外堀に架かる豊橋の手前で一旦止め置かれる。ここでは、曳山に「正装」という曳山の最終の飾り付けが施され、御旅所入場（神前入り）に備える。

御旅所に神前入りした曳山は、神輿堂に向かって狂言（子ども歌舞伎）を奉納し、狂言が終わると所定の席につき、二番山をシャギリで迎える。二番山の神前入りからは、曳山の提灯やぼんぼり、燭台に灯りが入れられ、若い衆も扇子のかわりに弓張提灯をもって綱先で曳山を招く。



【長浜城外堀に架かる豊橋】

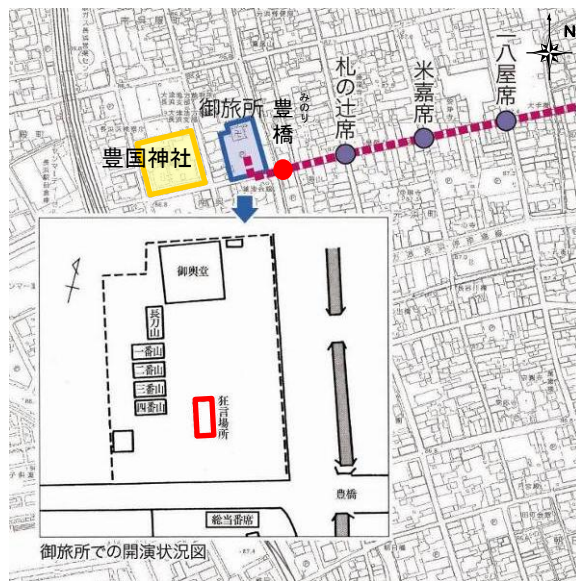


図 豊橋の位置と御旅所配置図

### 4月15日 神輿還御・戻り山

四番山の狂言（子ども歌舞伎）が終わり、全ての曳山が所定の位置に並ぶと、「神輿還御」が行われる。神輿堂におさめられていた神輿は、七郷の手により担ぎ出され、八幡宮へ戻ることになる。賑やかなシャギリに包まれる御旅所のなかを神輿は何度も巡り、さらに北国街道の札の辻までの間を何度も行き来したあと、ようやく神輿は八幡宮へ向かう。

神輿が札の辻を通り過ぎると「戻り山」が始まる。長刀組が最初に出発し、一番山、二番山の順で曳山は各町内へ戻っていく。



図 神輿巡行経路 実線矢印：渡御（12日） 波線矢印：還御（15日）



【神輿還御】

## 第2章 長浜市の維持向上すべき歴史的風致

図 曳山の巡行路と狂言席 (15日)

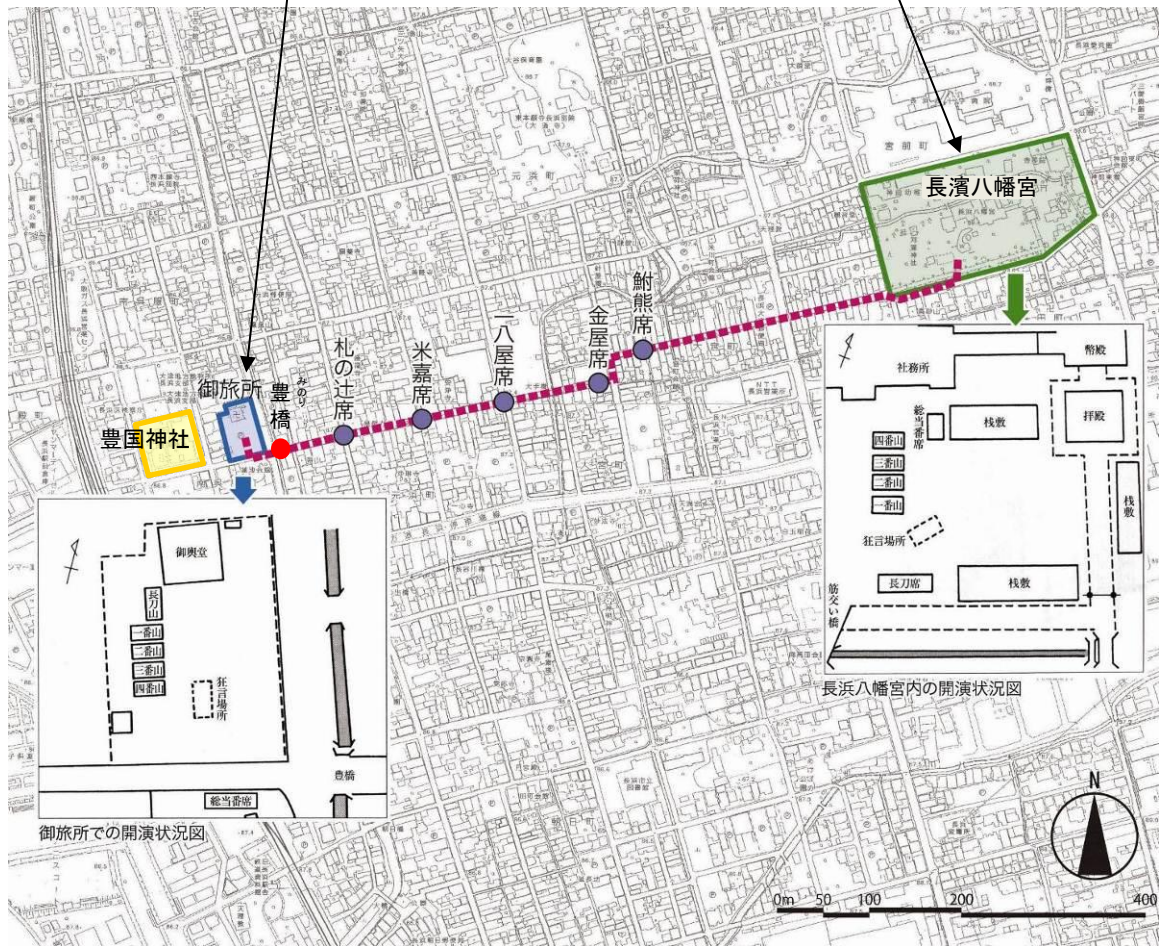


【御旅所での狂言奉納】

(市制50周年を記念し全基出場：平成5年)



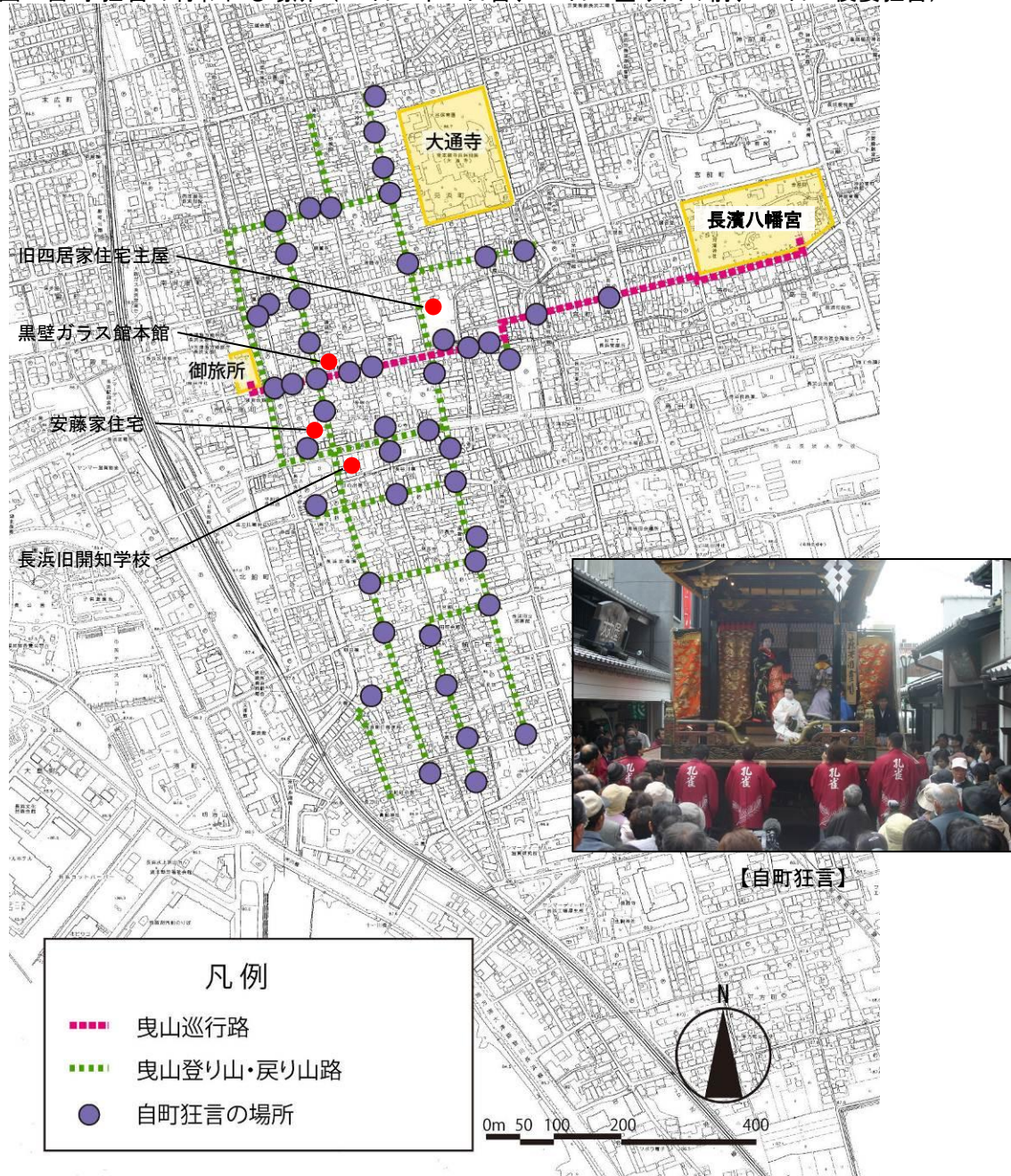
【長濱八幡宮での狂言奉納】



4月16日 後宴狂言ごえんきやうげん

16日は、各山組の町内で前述の「後宴狂言」が行われる。町内の人たちにゆっくりと見ってもらうため、場所を変えながら数回の狂言（子ども歌舞伎）が行われる。最終の曳山狂言は「千秋楽」とよばれ、山蔵前で行われる。達成感と安堵感に包まれながら、曳山は山蔵にしまわれる。

図 自町狂言じちょうきやうげんの行われる場所（13日：十三日番、14日：登り山の前、16日：後宴狂言）



4月17日 御幣返し

最終日の17日は「御幣返し」が行われる。13日に各山組が迎えた御幣を、同様の行列を組んで長濱八幡宮へ返しに行く。最後に御幣を本殿におさめ、ひとまず祭礼は終わりを告げる。

まとめ

桜の花が舞い散るころ、路地裏の町家からシャギリの音色が聞こえてくると、人々は長濱曳山祭の訪れを感じる。長濱曳山祭は、長濱八幡宮や御旅所、そして人々の暮らしの息吹が感じられる町並みなど、まち全体を舞台空間としながら、厳粛に、華麗で優雅に、そして時には氣勢高くして執り行われる。秀吉の時代に思いを馳せ、まちの発展に祈りを込めながら、人々は宵闇に揺れる弓張提灯の灯りを見つめている。

このように、長濱曳山祭の舞台であり、祭を受け継いできた人々が住む町家やシャギリの音色が響くその周辺の市街地を含めた広い範囲に歴史的風致が形成されている。

図 長濱曳山祭にみる歴史的風致の範囲

